6

お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
浅見　哲男	男　性	８８歳	２３歳	富岡中部

①　８月１５日は，どこでどんなことをしていましたか。

満州のハルビンにいた。自分は２６３部隊に所属していた。

②　終戦のことを，どこで，どのように聞かれましたか。

本部付きの通信兵をしていたので，すぐに分かった。終戦直前には，憲兵隊*1に編成替えになった。

③　敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

８月１５日は，ちょうどソ連機がハルビン駅を爆撃し，激しく攻撃していた。部隊の兵は防空壕に入ったが，私は通信兵だったので兵舎に一人残った。ソ連軍の侵攻により，他の部隊もどんどん引き揚げてきたので劣勢は感じていた。どうしようもないと思っていた。

④　体験の中で，子どもたちに語り伝えておきたいこと

「地獄のシベリア抑留」

昭和２０年８月９日のソ連の突然の侵攻は，全く予想外だった。武装解除をしたあと，ソ連兵に命じられ，手ぶらの状態でハルビンからプサンまで行って集結した。日本へ帰れるのかと思ったら，そこから鉄道で北へ向かい，ソ連国境のトマン江へ行き，シベリアへ送られた。

バイカル湖でいったん降りた。さらに西へ進み，シベリアのタイシェト市からは５０㎞ほど離れたニーベルスカヤという所へトラックで連れて行かれた。その収容所は幕舎（テント張りの営舎）で，大体１００人ぐらいいたように思う。収容所は３回替わったが，どこも同じように過酷だった。思い出したくもない，つらかったことばかりだった。

▲　連行される日本軍兵士

「昭和史　第八巻（研秀出版）より」

○　空　腹

一日の食事は，パンが３５０ｇ，野菜スープ５０ｇだけだった。あまりの空腹に，馬が

*1　軍隊内の秩序維持をおもな任務とする軍隊の一つで，軍における警察機能を担う。一般的には，軍人の犯罪を防止したり，逮捕した兵士を営倉（Ｐ－２８－本文参照）で管理・指導することなどが仕事。

食べるエン麦*1を炒って食べたりした。そこらに生えてくる野草やキノコを入れて量を増やし，水を飲んで空腹を満たした。豚のえさをとって食べる兵士もいた。自分は胃が弱かったので，そんなことはできなかった。

結果的にはそれが幸いした。上官に教えられたように，配給されたものをよくかみ，胃に負担がかからないように唾でまるめて飲み込むようにして食べた。空腹に耐えながら黒パンやスープを大切に食べる者は生き残り，水腹で一時の満腹感を求めた者は，栄養失調になって次々に倒れていった。毒キノコで苦しむ者もいた。

「昭和史　第八巻（研秀出版）より」

▲　ナホトカ収容所の給食

ナホトカ収容所の給食は黒パン３５０ｇとわずかなスープと野菜だけだった。それも基準量が支給されることはまれだった。

近くの小高い丘に，兵士がごろごろ寝ている時があった。食べたものが悪くて，腹をポンポンにしてもがき苦しんでいた。腹のものを出すのに，底に穴を開けたバケツに石けん水を入れ，その穴にチューブを通して浣腸した。働くどころではなくなった。

ある時，凍っていた馬ふんをジャガイモとまちがえて持ち帰った。ペーチカ*2にのせると，なぜかなくなってしまう。火でとけるまで，じゃがいもだと信じて疑わなかった。それほど空腹で，食べることに必死だった。

○　労　働

作業は，バム鉄道の建設工事をやらされた。朝６時には起き，歩いて作業場へ行った。帰ってくるのは，夕方の５時か６時ごろだった。夜間作業もあり，夜中の１２時ぐらいにたたき起こされたこともあった。多くの仕事は，鉄道を敷設するために土を運んで基礎を造ることだった。貨車に割り木を積む仕事もあった。食べものもろくにもらえないで重労働をさせられた。たまったものではない。体が弱った者から次々に倒れていった。

遺体が５，６体になると，収容所近くの森に穴を掘って埋めた。しかし，冬は土がカチカチに凍って掘れない。遺体は小屋へ積み上げた。春になると，遺体に油をかけて燃やした。人がどんどん入れ替わっていたので正確には分からないが，半分ちかくの人が亡くなったのではないかと思う。その中には，ハルビンでいっ

*1　イネ科の植物で，カラスムギともよばれる。種子は飼料または食用として使われる。
*2　ロシア語で暖炉やオーブンを意味する。レンガで造った暖房設備で石炭や薪を燃料に使う。（ペチカ）

しょに戦った戦友もいた。私は，こんな形で焼かれ，埋葬される戦友たちに手を合わせ首をたれた。「この次は，オレかもしれない」と思い，「戦争が終わったのに，こんなところで死んでたまるか。」とも思いながら冥福を祈った。

○　寒　さ

寒さは厳しく，冬はマイナス３０度ぐらい，一番寒い日はマイナス４０度になることもあった。風がない日は，特に気温が下がった。満州に松花江という川があった。夏は大きな船が通ったが，冬は凍ってその上を戦車が通れるほどだった。春先には，氷を１ｍ四方ぐらいに切っているのを見かけた。その氷を夏場の冷蔵庫代わりにすると言っていた。そのぐらい気温が低かった。幕舎の中にはストーブが二つあったが，天井には氷柱がたれ下がるほどだった。飢えと寒さと労働で，シベリアはまさに生き地獄だった。

○　利己主義

みんなで助け合うという意識はあまりなく，みんな利己主義になった。「共に助け合って生きて帰ろう」という気持ちもあった。しかし，何もかもがひどい状況で，自分がその日を生きのびることで精いっぱいだった。

一番嫌だったのは，反共産主義者に対する弾圧だ。ソ連は共産主義の考え方にさせようとしていたので，日本人の中にもだんだんその考えに賛同する人がでてきた。というより，そうしないと弾圧されて，いつ日本に帰れるか分からないからだった。早く帰りたかったら，共産主義になれ，というわけだ。だから，日本人同士でも信用できないような状況が出てきた。本当に嫌なことだった。

○　帰　還

昭和２３年の６月，ウラジオストクから舞鶴港へ入った。夢にまで見た日本の土がふめる喜びでいっぱいだった。ところが港では，自分だけがなかなか帰ることを許されなかった。２６３部隊の名簿になかったため，日本人ではないとまで言われた。編成替えがあったためだった。何を言っても信用してもらえず，何時間も待たされた。係官が憲兵隊の名簿を持ってきた。そこに自分の名前があり，やっと帰れるようになった。

２１年１２月に入ってようやくソ連からの引き揚げが開始された。写真はナホトカから帰還した第二陣で，舞鶴に入港した。（２１年１２月８日）

「昭和史　第８巻（研秀出版）より」

復員してしばらくしてからのこと。富岡の家にいると，名古屋から立派な服を着た若い男がやってきた。いきなり私に，

「お前どこにおった。」と聞いてきた。特高特高*1だった。私は，
「ご苦労さまと言われるのが当然なのに，その言い方は何だ！」
「日本のために出征して，シベリアへ抑留され，死ぬほどつらい難儀をしてきたのに，ご苦労さまの一言も言えないとは，それでも日本人か！」
とどなった。特高刑事は，頭を下げて謝った。共産主義者かどうか確認するために来たようだった。シベリアへ抑留されたばかりに，日本へ帰ってきてまでそういう目で見られようとは，夢にも思わなかった。人が信じられない思いがした。

シベリアへ抑留された人は大ぜい亡くなってしまった。祖国のために戦争を必死に戦ってきた。それなのに，戦争が終わってから地獄の生活が始まった。大ぜいの人が本当に無念な思いで亡くなっていった。どんなにくやしく，心を残しての最後だったか。なぜ殺されなければならなかったのか。頭の中は，食べ物のことや「日本へ帰りたい。一日も早く帰りたい。父母兄弟，妻や子どもが待つ日本へ帰りたい。」という思いだけだったろう。

子どもたち，シベリア抑留の真実を，どうか心に刻んでほしい。戦争のむごさ，悲しさを感じてほしい。これが過去のまぎれもない真実だから。

抑留・引き揚げについて

終戦時，海外にいた日本人は約６６０万人と推定されている。その範囲は，北はシベリア，満州，南はオーストラリアに及ぶ広大な地域に分散していた。悲惨だったのは大陸からの民間人の引き揚げだった。日本軍から見離され，ソ連軍，中国人から逃げまどう主婦中心の家族だった。全てを捨てて，体一つで祖国への長い道を歩き続けた人たちの足跡は，悲劇そのものだ。途中で家族がバラバラになった。引き揚げ港にたどり着けず，子どもが残留孤児になった。

昭和２０年８月８日，ソ連の突然の参戦によって満州，北朝鮮，千島，樺太方面から，軍人，民間人合わせて１０７万人もの人々がソ連に抑留された。鉄道でシベリア各地の収容所に送られ，長期にわたって強制労働をさせられた。

極寒の地で，粗悪な食事と重労働のため，約３４万人が亡くなったと推定されている。広大なシベリアを転々と移送され，帰国するまで５年，１０年を要した人たちもいた。

（参考：昭和史第８巻より）

▲ **満州からの引き揚げ者**（昭和２１．８．７ 博多）

「昭和史 第８巻（研秀出版）より」

*1　特別高等警察の刑事で，戦前は共産主義者を中心に取りしまった。